角川文庫
—1753—

女坂

円地文子

角川書店

昭和三十年十一月十五日　初版発行
昭和四十五年十月三十日　三十三版発行
定価は、帯・カバーに明記してあります

著作者　円地文子
発行者　角川源義
印刷者　橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

角川文庫
女坂

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　新興印刷・大谷製本

女坂

円地文子

角川文庫
1753

第一章

初花

初夏の午後であった。

浅草花川戸の隅田川を背にした久須美の家では母親のきんが朝からかかって念入りに掃除した二階の二間つづきの部屋の床に庭の白い鉄仙の蔓花を入れて、やれやれこれですんだというように片手に腰をたたきながらくらい梯子段を降りて来た。

玄関の隣の三畳の連子窓の下で川から来る明るい水明りに針の目をすかせて、仕立ものの縫糸をとおしていた娘のとしは、花畳紙を持って部屋へ入って来た母親に声をかけた。

「今、お隣りのボンボン（時計）が三時を打ってよ……お客さん、晩いねえ、おっ母さん」

「おや、もうそうなるかい。……どうで宇都宮から乗りつぎの人力車だというから、昼すぎといっても、夕方にはなろうよ……」

きんは茶の間の長火鉢の前に坐って長目の継羅宇の煙管に火をつけた。

「朝から精出したから、くたびれたでしょ。おっ母さん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

としはにっと笑って少しほつれた銀杏返しの髷にほそい縫針をすいすいとおしてから、絎台の赤い針坊主にさした。それから膝の上の浜縮緬らしい仕立物をそっと畳紙の上に移して、悪い足をひいて母親のそばへ出た。自分も一休みと思ったのである。

「毎日掃除をしていてもよく塵埃がたまるもんだねえ」

きんはたすきをとった袖口をぴんとのばして黒繻子の衿のほこりを潔癖らしく手ではたきながらいう。踏台にのって欄間から鴨居の長押の溝までさっぱり塵埃を拭きとったのが、娘には言わないが自慢なのである。

「白川さんの奥さんは、何だって、東京へ出てみえるんだろうね」

としは掃除には母親ほど興味がないらしく、針仕事につかれた眼のまわりを指先きでもみながらいうのだった。

「何ったって、お前……」

きんは不審そうに眉をよせて娘をみた。気の若い母親と病身で婚期を過してしまった娘は今では親子というより姉妹のようなつながり合いでものごとを話しあうのだったが、時々としの方がきんより年寄じみた考え方をした。

「東京見物だって手紙に書いてあったじゃないか……」

「そうかしら」

としは仔細らしく首を傾けていった。

「あの御新造……暢気に東京見物なんぞに出て見えるかしら……白川さんは、大書記官とかっ

て、県庁じゃ県令さんのすぐ下なんでしょ」
「そうだよ。大した羽振だって話だ」
きんはとんとん火鉢の縁で煙管をはたきながらいった。
「出世したもんだよね。前に東京府のお勤めで隣にいた時分にゃあんなになる人とは思わなかった……もっとも、その時分から、きれる人じゃあったけれどね」
「だからさ、おっ母さん」
と、としは母親の肩をたたくような声でいうのだった。
「その忙しい旦那を残して、お嬢さんと女中をつれて一、二か月がかりの東京見物なんて、何だかあんまり悠長でおかしいわ。お里があるわけじゃなし……」
「そうだよ……あの御新造も、白川さんと同じ熊本ものだもの……けど、お前……」
ときんは、想像がつかないらしく、娘の顔をまじまじみて、
「まさか離縁ばなしでもあるまい……白川さんからの手紙にそんな模様はちっともないもの……」
「そりゃそうでしょうよ」
としはいいながら、占いでもするような眼で火鉢の猫板に頬杖をついている。きんはこれまでにもこの足の悪い娘の予感することが妙にぴったり当るので、時々わが子ながら気味の悪くなることがあった。市子の口寄せでもみるような眼でしばらくとしの顔を見ていると、としは頬杖をはずして、

「わからないわ」
と首をふった。

白川倫が九つになる娘の悦子と女中のよしをつれて、久須美の家の前に俥から降りたったのはそれから一時間ばかりたった後であった。

取りあえず湧かしてあった風呂に入って、旅の塵埃を洗い落した後、倫は福島の名産だという干柿や会津塗などの外にきんにもとしにもそれぞれ似つかわしい反物を土産に持たせて、階下の茶の間へ来た。

縞ものに黒縮緬の五つ紋の羽織をどっしり着て、衣紋つきのいい撫肩の胸を少しそらせるようにして坐っている倫の様子には四、五年見ない中に、めっきり官員の奥さんらしい容態が具っていた。照りのいい黄味がかった顔色の額が稍々ひろく、厚肉の形のよい鼻を中心に眼も口もゆっくり間隔をとって置かれているので、神経質な印象はどこにもなかったが、はれた眼蓋の下におされたように細く見ひらかれている眼には、ちょうどその眼瞼を蔽いにしていろいろな表情の流出を、食いとめているような一種のもどかしさがあった。白川夫婦が東京に居たころ二年近く隣家に住まって懇意になっていながら、きんなどが倫に気の置けるところのあるのもその重たい眼ざしと崩したところのない言葉つきや動作のせいなのであった。それは、勿体ぶっているとか、意地の悪いとかいうのとは違っているので、批難しかねるのだったが、江戸っ子のきんに簡単にいわせれば、気のさばけない人とでもいうのだろうか。しかし若い時よりも良人の地位が重々し

くなった今では、倫のそういう堅くるしさもなかなか貫目があって立派に見えるときんは思った。
悦子はまだのび揃わない髪をお煙草盆にゆって、眼なれない川の眺めが珍しいらしく連子窓の方へばかり眼をやっていた。
「大そう綺麗におなりになりましたねえ」
ときんがお世辞でなしにいったほど悦子は色が白く中高の美しい顔立ちだった。
「お父さまによく似ていらっしゃる」
ととしもいった。ほんとうに悦子の頬の肉のうすい品のよい顔や首の長い身体つきは倫よりも白川に似ていた。倫は悦子にはこわい母親であるらしく、
「悦」
と倫が一声低くよぶと、悦子はすくんだように母の傍へ来て坐った。
「よく思いたって出ていらっしゃいましたこと。旦那さまも県令さん同様の御威勢だといいますから……奥さまのお心づかいも大変でございましょう」
ときんはせかせか煎茶をいれてすすめながらいった。
「いいえ、もう私どもお役向きのことは一向わかりませんので……」
と倫は口尠なにいって、白川さんは県ではお大名暮らしだそうだときんが人の噂さにきいている羽振のよい自慢話などは、穂も見せなかった。
盛り場の開けた話だの、髪形の少し見ない中にちがったことだの、新富座の芝居はどんな狂言を出しているかだの、東京を中心の世間話にしばらく花が咲いた後で倫は、

「私も、今度はゆっくり遊んで来いとゆるしが出ましてね……まあ、その中には少し用もまじっていますのですけれど……」

といって、傍にいる悦子の髪の赤い櫛をちょっとさし直した。何げない言葉つきだったのできんは少しも気にならなかったが、としはやっぱり何か倫が大切な用事をもっていることを感じた。しっとりと落ついてふるまっている倫の身体に何か常でない錘が沈んでいるように見えた。

その翌日出不精なとしが、昨日の土産の礼心に悦子を観音さまの御詣りに誘うと、よしも悦子も喜んでつれ立って出かけた。

「帰りに仲見世で絵草紙でも買ってお上げよ」

ときんは娘にいいつけて門まで送ったが、その足で二階へ上ってゆくと倫が次の間に坐って持って来た葛籠から衣類を出し入れしていた。白い雲のちらばっている空が川水に映って、倫の坐っている二間つづきの座敷も白っぽい明るさにひろびろしていた。

「まあ、早速に、御精が出ますこと」

といいながらきんが縁側に膝をつくと、倫はゆっくりした動作で着物を一枚一枚葛籠に収めながら、

「悦が大きくなったので、あれを持ってゆくこれも持ってゆくなど申して……旅をするにもめんどうになりました。……あの御隠居さん……いま御用はおありでしょうか」

といった。恰度膝を立てて葛籠の中へ悦子の黄八丈の袷を沈めるようにおいている時なので倫

の顔は見えなかった。きんはもとより世間話をしようと上って来たのであったが、倫にそういわれると何だか上って来たのがきまりの悪いような気分になった。

「いいえ……奥さま何か御用でございますか」

「いえ、お忙しければ、今にも限らないのですけれど、悦が出かけておりますし……まあ、ちょっと、こちらへおいで下さいまし」

倫はやっぱりゆったりした調子でいって、座敷の縁に近いところへ座布団をもって来た。

「あの……実は今度の滞在中に、是非あなたに御骨折願い度いことがございますのです」

「おや、何でございましょう。私のようなものでお間にあいますことなら、何でもいたしますけれど……」

きんは勢よくいってみたけれど、倫の行儀よく膝に手を置いて伏眼になっている顔から何を語り出されるのか想像は出来なかった。倫のゆっくりした長めの頬のはずれから口尻にかけて、うっすら微笑んでいるらしい微かな線が浮んでいた。

「妙なお話しなのですよ」

と倫はちょっと鬢の当りへ手を上げながらいった。身だしなみのいい倫の髪の毛はいつもきれいに取上げられているのだったが倫は一筋のみだれ毛をも見苦しがって時々髪を撫でて見る癖があった。

何か女についてのことらしいときんはその時気づいた。白川は東京にいるころにも女出入が多く倫が心配したことをしっているので、いまのような地位になり登れば猶更そういう事柄はある

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に違いなかった。でもそういう内情を推察したように立入るのは、都会人のエチケットに反しているのできんはやっぱりおぼおぼしい表情をつくっていた。

「何ですか、どうぞ、御遠慮なしにおっしゃって下さいましょ」

「ええ、どうせお頼みしなければならないことですから……」

倫の口もとにはやっぱり女面のようなほのかな笑いが漂っていた。

「あの実は、小間使を一人抱えて帰り度いのでございます。年は十五から十七、八ぐらい……出来れば堅い家の娘で……縹緻のいい子でないと困ります」

終りの言葉をいった時口もとの微笑がはっきりして、厚い眼瞼の下の眼がその笑いと凡そふさわしくない生真面目な光を湛えた。

「ああ、なるほど……」

そういった自分の声がいかにも軽薄に聞えて、きんは下を向いた。それだけきけば先日としの予感したことははっきりのみこめるのだった。

うなずくとも溜息ともつかず息を深く吸ってからきんはいった。

「やっぱり、もうああいう御身分におなりなさると……そういうものが要りますんでしょうねえ」

「どうも……やっぱりねえ、端が承知いたしませんのでねえ」

それは嘘だった。倫は胸の中に噴上げて来る感情を力一杯おさえつけおさえつけていた。

夫が妾を新しくかかえようとしているのはもう一年ほど前からの計画だった。白川にとり入っ

ている下役達は倫が酒の席などにいるとよく、

「奥さん、このくらいのお邸に、お腰元が不足していますな」

とか、

「大書記官も多忙すぎますよ。ちっと変った枕で楽寝をさせてお上げなさい」

とか立入った口をきいた。部下に甘くみられる事の大嫌らいな白川が、妻にそういうことをいう時だけ、それらの無遠慮な男達をたしなめもしないのを見ると、倫には夫が彼らの口をかりて自分に相談をかけているのだと思えた。

女にかけては放埒な白川を倫はもうこの年までによく知ってい、結婚して数年のような純な愛情は夫に持てなかったが、それでも敏腕で男ぶりのよい白川は倫には充分魅力のある良人であった。

細川藩の下級の武士の家に産れて維新前の混乱した秩序の間で教育も芸ごとも碌々身につけず早く結婚してしまった倫には今の良人の位置にふさわしく交際や家政をとりさばいてゆくのはなかなかの仕事だった。でも気象の烈しい倫は夫と家とを大切に思う道徳できびしく自分を縛って、誰れからも非をうたれないように油断なく家事に心をつかって暮らしていた。倫とすれば一ぱいの愛情と智慧が夫を中心とした白川家の生活につめこまれていたのである。

それだけに倫は年よりもふけていた。美人ではないが十人並みの縹緻で、身だしなみもよい方だったから、特に年寄じみているわけではなかったが、性来の堅い気性なのが責任をいつも重く荷なっているので、年増盛りの女に見られる熟れた肉感など薬にしたくもなく、白川からみれば

十以上も若い筈の妻が時に姉のように見えて驚かされることがあった。もっとも倫のそうした厚い表皮の下には熱い血が油火のように強く燃えていることも白川は誰れよりも知っていた。白川はそういう倫のおさえた情熱にほてりを感じる時があった。それは明らかに自分達が産れ育った中九州の照りつける容赦のない夏の陽を連想させた。まだ山形に勤めているころ、夏の夜どうしたことか夫婦の寝ている蚊帳の中に小さい蛇が入っていたことがあった。ふとめざめて白川は浴衣の胸のあたりに、冷りと水のような感じをうけた。おかしいと思って手をやるとその冷たさがするすると滑り出した。

白川が声を立てて飛び起きると、倫もおどろいて身を起した。枕もとの行燈を引きよせて火皿を向けると、夫の肩に黒い紐のようなものがぬらりと光ってたれていた……

「蛇！」

と白川が叫んだのと、倫の手がのびて夢中にその生きている紐を掴んだのと一緒だった。

倫は白川ともつれるように縁へ出て開けてあった雨戸から庭にそれを投げた。倫の身体はふるえていたが、寝間着の衿のはだけた胸にもあらわにした手にも、いつもの倫が封じて見せまいとしている生々しさが逞しく匂っていた。強気な白川は、

「何故捨てる……殺してやるのに……」

と倫を叱ったが倫の情熱を感じながら、白川にはもうそのころから倫が愛情の対象にはなりにくくなっていた。自分の強気の一枚上をゆく強さが倫にあるのが、けぶたくなじめないのだった。

「妾というといやに表立つが、お前にも小間使だ……よく仕込んでお前が交際で外へ出るよう

な時にも安心して委せて置ける性質のいい若い女がうちにいるのもいいじゃないか。だからおれは芸者などうちへ入れて風儀をわるくしたくない。お前を信用してお前に一切委せるから、若い……出来るならおぼこな娘がいい、そういうのをお前の眼鏡で探して来てくれ。費用はこの中から使ってくれ」

そういって白川は、倫のおどろいた程大枚の金を目の前に置いた。

いままで他人の口からいわれていた時はきかぬ振で通していた倫も、白川からそう口をきられるともうどうすることも出来なかった。自分がこの役目を断れば夫は恐らく勝手に自分で選んだ女をうちへ引入れるであろう。「お前の選択に委せる」という言葉の中には白川が家の為に倫の立場を重くみている信頼が含まれているのである。その奇妙な信頼を重く胸にしまって、倫は東京見物を楽しんでいる悦子やよしをつれ人力車にゆられ通して久須美の家まで運ばれて来たのだった。

「ようございます。私の懇意な女の小間物屋にそういう口入れをよくする人がございますから、早速、頼んで見ましょう」

きんは倫の心の奥の重さにいい工合にふれて来ず事務的に話を運んで行った。蔵前の札差の分れだという家に産れて、旧幕時代の大きな町人や武家の気風をしっているきんには、男は出世すれば妾の一人や二人持つのは不思議でもなんでもなかった。かえって家の盛って行くあらわれのようで奥さんも嫉妬半分、少しは得意も交っているだろうぐらいにきんは想像していた。

それゆえ夜になって、娘と二人床へ入ってから、まだ気を置くように声をひそめて、ちらちら二階へ眼を走らせながら、そのことをとしに話した時も、

「気の毒だねえ」

という娘の沈んだ声にむしろびっくりしたくらいだった。

「あの御新造……お母さんはしばらく見ない中に貫目がついて立派になったというけど、私には苦労の貫目みたいに見えるわ。うちの格子があいて、入って来た顔をみた時、私、ああと思ったもの……」

「福のある人には、それだけの苦労もついてまわるものさ……」

ときんはこともなげにいった。

「まあ、何しろ、性のしれた、気質のいい娘を世話して上げたいものだ。旦那は生娘がなければ、半玉でもいい、すれていない女ならいいっていいなさったそうだけれど……」

どの部屋もひんやり静まって大寺の庫裏のような県庁の官舎から出て来てみると、隅田川のひろい水の眺めが眼の前にあって、船の艫を押しきる音や川波のゆれるそよぎが一日中耳についているこの家の二階はひどく陽気で幼い悦子の気に入った。よしが用をしている間悦子は裏木戸から桟橋へ出て足もとの杙をゆすっている水のゆるやかな動きを眺めたり、忙しそうに漕ぎすぎてゆく荷船の舟頭の威勢のよいかけ声に耳をとられたりしている。そんな時、連子格子の間からとしの青白い顔がのぞいて、

「お嬢ちゃん、気をつけてよ、落ちちゃいやですよ」
と声をかける。今日もきんは倫と一緒に出かけているのである。
「大丈夫よ」
と悦子は、ふり向いてにっと笑う。年より大人びてみえる細面の整った顔に、紅の切れをかけた小さい髷が可愛かった。
「お嬢ちゃん、いいものを上げるからいらっしゃい」
「ええ」
と素直にいって、悦子は紅い縞のたもとをゆらゆらさせて、窓の下へ来た。連子の下の狭い土を軟かくならして、きんの丹精している朝顔が五、六本細い竹にからみついて蔓をのばしていた。外からみると窓の中のとしの顔もひろげている縫物も悦子にはうちでみるのと別のように見えた。としは連子の間から痩せた手を出して、指先きにつまんでいる紅絹の小さいくくり猿を悦子の眼の前でふらふらふってみせた。
「綺麗ねえ」
と悦子は連子に両手でつかまって、うれしそうに糸の先の小さい猿をみている。その顔があどけなくほころびているのでとしは、この子はお母さんがいないでも淋しがらないと思い、ひとりでうなずくのだった。
「お母さま、どこへいらしったの」
くくり猿の糸をふらふらさせている悦子にとしはきいてみる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com